

[論文]

教科教育研究（宗教）における「人物史」の 展開の可能性（I）

「ガンディーの思想の背後にあるもの」（I）

佐々木 勝彦

中学校および高等学校の宗教科の授業では、特定の教科書を用いずに、教師が独自に開発した教材を使用しているケースが少なくありません。しかしそれが一般に公開されることはめったになく、その説明責任が問われることもあります。あるいは、教科書が用いられる場合にも、いわゆる指導要領案がないため、自由といえば自由ですが、その教育は教師の準備の質いかんによって大きく左右されがちです。

本論は、そのような教育現場をさらに改良しようと、日々、教材研究に取り組んでおられる先生方の苦労を意識しつつまとめたものです。ある特定の人物を紹介する場合に、本論のようなものがあれば役立つのではないかと、という一つの提案です。しかも今回は、そのまま教材として用いる以前に、本来、教師の頭の中に入れておくべき事柄として整理してみました。

はじめに

皆さんは、「マハートマ（偉大なる魂）」という尊称で呼ばれた「ガンディー」についてどんなことを知っていますか。彼は、一九四八年一月三〇日、デリーのビルラー邸庭園内の礼拝場に向かう途中、ヒンドゥー教過激派のナトゥーラーム・ヴィナーヤク・ゴードセーにより、小型自動ピストルで射殺されています。彼は、生涯、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の対話と融和のために働き、一九四七年八月一五日に催された、インドとパキスタンの分離独立を祝う記念式典にも出席しませんでした。

彼の波乱に満ちた七八年の生涯は、現代のわたしたちにも多くの問いを突き付けてきます。特にその「非暴力の思想」は、軍事力や経済力といった「力の論理」に対し、明確に

「否！」と宣言しています。では、彼は政治家だったのでしょうか。社会運動家だったのでしょうか。それとも宗教家だったのでしょうか。おそらく、そのどれか一つに納めきれないことが、彼の魅力なのでしょう。

今回は、この「ガンディー」の初期の経験とその宗教的背景を取り上げます。というのは、彼は自らに禁欲的な生き方と「断食」を課すことにより、現実の政治的課題を解決しようとして、それに成功したからです。その姿勢が多くの人びとの支持を得たからです。彼の『自叙伝』を読むかぎり、それらの着想の種はすでにその幼年時代に蒔かれていました。

ここで直ちにこの問題に入る前に、彼の生まれた時代のインドの状況とそれに至るまでの略史ならびに彼の略年譜を挙げておきます。これらを手がかりに、彼の時代を想像してみてください。

当時のインドはイギリスの植民地で、ヴィクトリア女王を皇帝とする「インド帝国」（一八七七—一九四七）と呼ばれ、その広大な国土は、イギリスが直接支配する直轄領と、インド人の国王を介してイギリスが間接的に支配する「藩王国」の二種類に分かれていました。ガンディーの生まれたポールバンドルは、この藩王国の一つに属しています。

イギリスがインドに進出したのは一七世紀のことで、当初は、胡椒や綿などの商業取引を目的としていました。やがてイギリスは他のヨーロッパ諸国の支配を退け、次第に領土を拡張し、一九世紀の半ばにインドを完全に植民地化しました。これ以後、インドは、政治と経済だけでなくあらゆる面でイギリスに支配され、その搾取の構造に悩まされるようになりました。ガンディーが生まれたのは、このように祖国が極めて悲惨な状況に置かれているときでした。

「ガンディーの思想の背後にあるもの」を考えるには、以上のような政治的社会的状況と共に、イギリスが打ち破ったムガル帝国（一五二六—四〇、一五五五—一八五八）の宗教政策をふりかえっておく必要があります。というのは、ムガル帝国はイスラーム教徒（ムスリム）によって建てられた国家だからです。イスラーム教がインドに進出したのは一〇世紀後半から一一世紀初頭のことで、一二〇六年には、デリーに首都を置くインド初のイスラーム王朝（「奴隷王朝」一二〇六—九〇）が誕生しました。その後このデリーには、一五二六年まで四つのイスラーム王朝が続き、この五つの王朝は総称してデリー・スルタン朝（デリー・サルタナット）と呼ばれています。この約三百年の間に、イスラーム商人の交易活動とイスラーム神秘主義者（スーフィー）たちを通して、インド民衆の間にもイ

スラーム教に改宗する動きが浸透して行きました。

アフガニスタンから南下してきたバーブルが、このデリー・スルタン朝を打ち破って建てたのがムガル朝です。そしてこのムガル朝は、それ以後、一九世紀半ばにイギリスの直接統治下に入るまで、約三百年間存続しました。第三代皇帝アクバル(一五五六-一六〇五在位)は、その版図を南インドの一部にまで広げ、ヒンドゥー教をはじめ諸宗教に寛大な政策をとりました。しかし第六代皇帝アウラングゼーブ(一六五八-一七〇七)は、これと反対に厳格なイスラーム教の遵守を唱え、ヒンドゥー教徒の反乱を招きました。

この概観から推測されるように、北インドでは六百年以上にわたって、イスラーム教を基本とする王朝が支配し、イスラーム教とヒンドゥー教は緊張関係にありながらも、全面的対決には至らず、様々な習合現象も起こっていました。

ところがイギリスの植民地時代になると、国勢調査が行われ、人びとは自らの信ずる宗教をひとつ選ばなければならなくなりました。この結果、各地で儀礼の体系も、信ずる神々も様々にちがっていたはずのヒンドゥー教が、ひとつの宗教として意識されるようになりました。ヒンドゥー教とイスラーム教の曖昧な関係が許されなくなったのです。そしてやがてこれは、インドをイスラーム教徒(ムスリム)を中心とする地域と、ヒンドゥー教徒を中心とする地域に分け、両者を分割して統治する口実とされました。イギリスは、「分割統治」という戦略を選択したのです。それは、インドの内部分裂をあおることにより、独立運動を抑止しようとする政策でした。

ガンディーが独立運動の中で常に心がけたのは、この「分割統治」による宗教対立の激化という悲劇を極力回避しつつ、しかも「宗教的行為」によって人びとを連帯させることでした。その方法として選ばれたのが、「歩くという行為」「非暴力的不服従」そして「断食」なのです。

I 略 歴

一八六九 一〇月二日、インド、グジャラート州ポールバンドルに、父カラムチャンド(通称カパー)・ガンディーと母プトゥリーバーイーの四男として生まれる(父は、ポールバンドルの藩王国の役職を辞した後で、ラージコート(ラージャスターニック・コート)の委員を務める。逝去のときはラージコート藩王国の年金受給者であった)。

一八七六 ラージコートに一家で移り住む。地元の小学校に転校。

一八七七 ヴィクトリア女王、インド皇帝即位を宣言。インド帝国の成立。

一八八一 ラージコートのハイスクールに入学。喫煙や肉食をおぼえる。

一八八二 一三歳で、ポールバンドルの商人ゴークルダース・マーガンジーの娘で同年齢のカストゥールバーイーと結婚（「幼児結婚」）。

一八八五 父死去（六三歳）。最初の子供、生後三、四日で死亡。

一二月、第一回インド国民会議開催（国民会議派の創立——イギリス植民地政府に対する請願の場を確保するために、インド人エリート政治団体として結成される。ガンディーが反英大衆運動を主導し組織の主導権を握った一九二〇年以降、大衆的基盤を備えた政党となり、四七年にインドの独立を勝ち取った。五〇年以降ネルーの指導権が確立し、議会制民主主義や世俗主義、対外的には非同盟運動など、国家の基本が固まった）。

一八八七 バーヴナガールのシャーマルダース・カレッジに入学したが、一学期でやめる。

一八八八 長男ハリラル誕生。留学の計画を中止するようにとの命令を拒否し、カーストから追放される。九月、法学勉強のためにイギリスへ留学。ロンドンの「インナー・テンプル」法学院に入学。

一八八九 菜食主義に興味をもち、インド古典を読む。

一八九一 夏、弁護士の資格を得て、インドへ帰国。ボンベイ（現ムンバイ）に弁護士事務所を開くが失敗。ラーイチャンドバーイーと交友を結ぶ。

一八九三 四月、インド人商社の顧問弁護士として単身南アフリカへ渡る。インド人に対するひどい人種差別を体験。

一八九四 顧問弁護士の仕事を終えて帰国の準備をしたが、懇請されて南アフリカにとどまり、公共のための活動をしながら弁護士として生業をたてる。インド人の選挙権剥奪法案に反対して嘆願書を送付したが、法案は通過。五月二二日、「ナタール-インド人会議」を組織（二五歳）。

一八九六 インドに一時帰国。妻と二人の息子、未亡人となった姉の息子と共に南アフリカへ立つ。

一八九七 一月一三日、ダーバン上陸の際、インドで南アフリカ問題について書いたものに対するヨーロッパ人の反感から、暴徒に襲撃される。

一八九九 ボーア戦争（一九〇二）に、インド人野戦衛生看護部隊を組織して参加（これは、南アフリカにおける、イギリスとオランダ系ボーア（ブール）人との戦争である。オレンジ自由国とトランスヴァール共和国に豊富な金鉱が発見されたため、イギリスがこれを奪おうとして勃発。ボーアは敗退するが、一九一〇年、イギリス連邦内の自治領として、ケープ、ナタール、トランスヴァール、オレンジ自由州の四州から成る南アフリカ連邦が成立。一九六一年、これがイギリス連邦から離脱して、南アフリカ共和国となる）。

一九〇一 「インド人社会に必要なが生じたときには、いつでも南アフリカに戻る」ことを条

件に、家族と共に帰国。一九〇二年にかけて、インド各地を旅行。カルカッタで国民会議派大会に出席。ゴーカーレー(一八六六-一九一五、国民会議派の穏健派の指導者)と一カ月生活を共にする。

一九〇二 ボンベイで弁護士事務所を開く。一二月、インド人社会からの至急の招請で南アフリカへ戻る。

一九〇三 夏、ヨハネスバーグで弁護士事務所を開く。南アフリカ各地でインド人に対する差別政策が強まる。『バガヴァッド・ギーター』を研究。

一九〇四 ラスキンの『この後の者にも』を読み、ダーバンの近くにフェニックス農園を開く(ここでの共同生活は、一九一〇年にヨハネスバーグ郊外に開園されたトルストイ農園での共同生活と共に、一九一五年に開設されるアーシュラムの原体験となった)。週刊誌『インディアン-オピニオン』を創刊。

一九〇六 ズルー族の「反乱」の際に、インド人衛生看護部隊を率いて従軍。生涯禁欲(ブラフマチャリヤ)の誓いを立てる。九月、インド人のトランスヴァールへの移民を禁ずるアジア人登録法案に反対して、ヨハネスバーグで集会を開き、最初のサティヤーグラハ闘争を展開(サティヤーグラハは、ガンディーによって提唱された、インド人差別に対する非暴力・不服従運動。この運動形態は当初「受動的抵抗」と呼ばれたが、ガンディーはまもなく「真理の堅持」を意味する「サティヤーグラハ」(satya(真理)+agraha(執拗な主張, 固執))という言葉を採用し、これを広めた。ガンディーが一九一五年にインドに帰国したのちには、イギリスの支配に対するインド人の抵抗を示す手段として、あるいは、農民、労働者、下位カーストなどが自らの経済的・社会的条件の改善を訴える手段として、このサティヤーグラハを組織するようになった)。一〇月、インド人問題を植民省へ陳情するためにロンドンへ行き、一二月、南アフリカへ戻る。

一九〇七 三月二二日に成立した「アジア人登録法」(インド人に、住所、氏名、カースト、指紋などを登録した身分証明書の携帯を義務づける法で、暗黒条例とも呼ばれた)に反対して、「パッシヴ・レジスタンス協会」を組織。大集会を開催。一〇月、逮捕される。

一九〇八 一月、サティヤーグラハ闘争で裁判にかけられ、ヨハネスバーグ刑務所で二か月間服役(最初の懲役、ガンディーは生涯の間に、二三三〇日以上を刑務所で過ごしている)。同、プレトリアでスマッツ将軍と会談、妥協が成立して釈放される。二月、スマッツ将軍との妥協を理由に、インド人過激派ミール-アラームらに襲撃されて負傷。八月、スマッツ将軍の違約後、登録法の廃棄を目指して第二回サティヤーグラハ闘争を開始。登録証明書をもっていないことを理由に逮捕され、フォクスルスト刑務所で二か月間服役。獄中でソロー『市民的抵抗の思想』(山崎時彦訳、未来社、一九七八年)を読む。

一九〇九 二月、フォークスルスとプレトリア刑務所で三カ月の懲役を言いわたされる。六月、インド人問題について陳情するために渡英。十一月、南アフリカへの帰国の船中で『ヒンドゥー-スワラージ（「自己統制」の意味で、『真の独立への道』田中敏雄訳、岩波書店、岩波文庫、二〇〇九年、と訳されている）』をグジャラーティー語（この言語はインド・アリア語族に属し、国内で四二〇〇万人、イギリス、アメリカ、南アフリカなどでも多くの話者人口をもつ）で書く。

一九一〇 ドイツ人カレンバッハ（一八七一一一九四五、ユダヤ系ドイツ人。建築家。仏教への関心からガンディーと共同生活をする）、ヨハネスバーグ郊外に一一〇〇エーカーの土地を購入し、これをサティヤーグラハに無償で提供。トルストイの許可を得て、トルストイ農園と命名。

一九一三 フェニックス農園の二人のメンバーの道徳的腐敗を償うために、断食（一日一食を四カ月以上）。九月、キリスト教の儀式によらない結婚は非合法である、とする条例に反対する闘争に協力。十一月、二〇〇〇人以上のインド人鉞夫による、ニューカッスルからトランヴァールを越えてナタールへ向かう「大行進」を指導して、第三回サティヤーグラハ闘争を開始。パームフォード・スタンダートン・ティークワースで四日のうちに三度逮捕され、ダーンディーで九ヶ月の懲役を言いわたされる。

一九一四 一月、フェニックス農園の仲間の道徳的墮落の償いのために、十四日間の断食。第一次世界大戦が始まる（一八）。

一九一五 インドで最初のサティヤーグラハ闘争を開始。五月、アフマダーバードの近くのコチラブにサティヤーグラハ-アーシュラムを設立。不可触民の家族を収容（このアーシュラムは、一九一七年、サバルマティ河岸に移され、一時政治運動の第一線から身を退く一九三三年まで、ガンディーの活動の拠点となった）。

一九一六 二月、ベナーレスのカーシー・ヒンドゥー大学定礎式で講演。

一九一七 チャーンパラン（ビハール州）の藍プランテーションにおける小作民の権利を守るサティヤーグラハ闘争に成功。

一九一八 二月、アフマダーバードで、紡績工場労働者のストライキを指導。三日の断食（インドで第一回目の断食）。工場主が調停に応じ勝利。三月、ケダー農民のためのサティヤーグラハ闘争。デリーで総督の主宰する戦争会議に出席、インド人傭兵を支持。募兵活動を始めたが、病に倒れ、危篤状態に陥る。回復期に山羊の乳を飲み、手紡ぎ車を覚える。

一九一九 春、治安維持のために市民的自由を剥奪し、逮捕状なしの逮捕や、通常とは異なる裁判形態を可能にするローラット法の成立。第一回目の全インド的サティヤーグラハ闘争を計画。四月、ローラット法に反対して全国的ハルタル（罷市＝仕事を停止すること。元来は、商人が抗議や哀悼の意を表すために商売を停止し、店舗を閉鎖することを意味したが、ガンディー

はこれを反英運動の手段とした)。暴力への償いのために、サバルマティで三日間の断食。民衆の訓練が不十分であったために、ガンディーの言う「ヒマラヤの誤算」が起こり、サティヤグラハ闘争を延期。『ナヴァジーヴァン』誌とその英語版『ヤング・インディア』誌を創刊。

一九二〇 四月、全インド自治連盟総裁に選ばれる。六月、アラハバードのムスリム会議、ならびにカルカッタ(九月)、ナグプール(一二月)の国民会議派大会で、対英非協力のサティヤグラハ闘争が決議される。八月、イギリスからもらったカイザリー-ヒンド勲章を返還し、第二回目の全インド的サティヤグラハ闘争を開始。

一九二一 ボンベイで最初の手製木綿衣(カディー)販売店を開く。八月、ボンベイで外国製衣類を焼く。九月、シャツと帽子の着用をやめ、手製木綿と単純生活を愛好して、インド風の腰衣だけを身にまとう。十一月、プリンス-オブ-ウェールズ(後のエドワード八世、ウィンザー公)の来印をハルタルで迎える。宗派的な暴動が起こったため、ボンベイで五日間の断食。一二月、獄中で、数千人の人たちと連帯して不服従を実践。

一九二二 二月、北インドのチョウリー・チョウラーで農民たちが警察署を襲撃、放火(「ヒマラヤ程の大誤算」)。非協力運動を中止。

一九二四 一月、急性虫垂炎の手術を受ける。

一九二五 十一月、『ナヴァジーヴァン』誌に『自伝』の連載を開始。英語訳は『ヤング・インディア』誌に。

一九二八 十一月、バールドリーでサティヤグラハ運動を開始。

一九三〇 一月、第二回目のサティヤグラハ運動を開始。三月、「塩のサティヤグラハ行進」。七八人のアーシュラム住人の男女と共に、ダーンディーに向けて行進(三九〇キロの行程)。四月、海浜で塩を集め、塩税法を破る。十月、第一回英印円卓会議。

一九三一 三月、第二回英印円卓会議のためロンドンへ。一二月、ロマン・ロランを訪問。

一九三二 十一月、第三回英印円卓会議。

一九三三 二月、獄中より『ハリジャン』誌を創刊。

一九三四 九月、国民会議派からの引退を表明。

一九三五 四月、中央インドのワルダーに、セーワーグラーム・アーシュラムを開設。

一九三七 一月、州議会選挙で国民会議派が大勝し、ムスリム連盟は敗退。

一九三九 九月、国民会議派、戦争協力の拒否を決議。

一九四〇 三月、ムスリム連盟、ムスリム国家(パキスタン)の独立を求める決議を採択。七月、国民会議派全国委員会、完全独立と民族政府の樹立を求める決議を採択。十月、第二次世界大戦への参戦に反対、言論・出版・集会の自由を要求して個人的不服従運動を指導。

一九四二 『ハリジャン』を再刊。八月、逮捕されて、監禁される。カストゥールバーイーも逮捕され、監禁される。

一九四三 二月、無条件釈放を要求して、二十一日間の断食を開始。

一九四四 二月、妻カストゥールバーイー死去（満七四歳）。ガンディー、健康がすぐれず、無条件で釈放される（これが生涯最後の獄中生活となった）。九月、ムスリム連盟総裁ジンナーと会談。

一九四六 三月、ニューデリーでイギリス政府使節団と会見。十一月、ムスリムとヒンドゥーの融和のため、東ベンガル・ノーアーカーリ地方の四九の村落を歴訪。

一九四七 三月、ムスリムとヒンドゥーの融和のため、ビハール・パンジャブ地方を歴訪。ニューデリーで総督（マウントバッテン卿）およびジンナーと会見。五月、祖国をインドとパキスタンに分割することを受け入れた国民会議派の決定に反対。八月、インドの分離独立を祝う式典に参加せず、カルカッタの暴動の鎮定のために断食。

一九四八 一月三〇日、デリーのビルラー邸庭園内の礼拝場に向かう途中、ヒンドゥー教過激派のナートゥーラーム・ヴィナーヤク・ゴードセイにより、小型自動ピストルで射殺される。満七八歳。二月一二日、その遺灰が聖なるガンジス川に流される。

（坂本徳松『ガンジー』清水書院、一九六九年、二〇〇四年、M・K・ガンディー『ガンディー自叙伝2』田中敏雄訳、平凡社、二〇〇〇年、二〇〇九年、マハトマ・ガンディー『私にとっての宗教』竹内他訳、新評論、二〇〇二年、中島岳志『ガンディーからの〈問い〉』NHK出版、二〇〇九年、を参照）

II 『自伝』は語る

父カラムチャンド（通称カバール）・ガンディー

カバール・ガンディー（本論では、書名以外すべて「ガンディー」と表記）、それが私の父。ポールバンダルの藩王国の役職を辞した後で、ラージャスターニック・コート [ラージコート] の委員を務めました。[現在はありませんが、当時、首長と一族間の紛争を解決する強力な機関でした。] 後に、ラージコートの、短期間でしたが、ヴァーンカーネールのディーワーン職（民事事件の調停、地租徴収、国境線の画定、治水工事の監督などを行う職務）を務めました。逝去のときはラージコート藩王国の年金受給者でした。

カバール・ガンディーもまた、[それぞれ妻が死去したので] 次々と四度、結婚し

ました。最初の二人の妻との間に二人の娘、最後の妻プトゥリーバーイーとの間に一人の娘と三人の息子。末っ子が私なのです。……

父が受けた教育はただ体験によるものだけでした。今日のグジャラーティー語小学校五年生程度 (当時小学校は五年制) の教育を受けたといえましょうか。歴史、地理の知識はまったくありません。それでも実務能力は高く、込み入った問題の処理に、何千人というひとたちを使いこなすことができました。宗教についての知識は無いに等しいほどでした。無数のヒンドゥー教徒が、寺院に参詣したり、カター (宗教的語り) などを聞くことで、宗教についての知識を容易に身につけていますが、その程度の知識は持っていました。晩年には、家族とも親しい学識のあるバラモンの助言で、『ギター』の朗唱を始めるようになりました。毎日、朝の礼拝のとき、二、三のシュローカ (頌) を大きな声で朗唱していました。(M・K・ガンディー著『ガンディー自叙伝 1』田中敏雄訳注、東洋文庫 671、平凡社、二〇〇〇年、二八-三〇頁——以下、『自叙伝 1』と略記)

この記述から、ガンディーの父は、壮年期まで宗教に積極的に関わったことがなく、晩年になり、あるバラモンの勧めで毎朝『ギター』を朗唱していたことが分かります。この父が六三歳で亡くなったとき、ガンディーはまだ一六歳であり、彼の脳裏に焼きつけられたのは父の晩年の姿でした。

この記述に出てくる「バラモン」は、インドの「ヴァルナ (種姓)」の最高位の祭司階級を指します。「ヴァルナ」は、もともと「色」を意味し、アーリア人が先住民との肌の色の違いに基づいて社会集団を区別したことに由来します。「バラモン」「クシャトリア」「ヴァイシャ」「シュードラ」という四つのヴァルナ概念が生まれたのは前八世紀頃です。紀元四世紀から七世紀にかけて、この四姓の枠外に不可触民が置かれるようになりました。さらに一〇世紀頃から、ヴァルナ概念が「ジャーティ」と結びついて、カースト制度が形成されました。この「ジャーティ」は「生まれ」を意味し、「職業の世襲、婚姻、食卓を共にしうる集団」を指します。なおカーストという言葉は、ポルトガル語の「カースタ」(出生、人種、種族) に由来します。

ガンディーはその自伝の冒頭で「ガンディー家は以前、香辛料を商う家であったように思われます」と述べているので、「ヴァイシャ」に属しています。

このカーストに対するガンディーの態度は必ずしも明瞭ではありません。たしかに彼は、不可触民の差別の廃止を求めて、一九三三年に、機関誌『ヤング-インディア』を『ハリジャ

ン』と改題しました。「ハリジャン」とは「神の子」という意味です。この新しいタイトルは、この世で不当な差別と抑圧を受けている不可触民こそが、次の世において「神の子」として生まれ変わることを主張しています。しかし彼は、カーストそれ自体の解体は求めませんでした。晩年になるほど、カーストの差別的機能に対し批判的になって行きますが、相変わらずそこに「調和的社会」の機能を認めていました。

『自叙伝Ⅰ』の冒頭部の記述の中で、もうひとつ注目しなければならないのは、『ギター』への言及がみられることです。『ギター』は『バガヴァッド・ギター』の略であり、これはヒンドゥー教の諸派の聖典となっています。この書物は紀元一世紀頃にまとめられたもので、ヒンドゥー教の代表的な諸派の開祖や指導者たちは、この聖典に注釈を加えるという仕方で自らの立場を展開しました。ガンディーもこの聖典を愛し、『自叙伝Ⅰ』の中で「今日では最高の哲学書だと思っています」（一三二頁）と述べています。『ギター』は「なすべきこととなすべきでないことを決定する際の典拠」（一六・二四）とみなされており、それは、一方で戦場における殺傷を公然と命じつつ、他方で「不殺生、真実、怒らぬこと、捨離（無所有）、静寂、中傷しないこと、生類に対する憐愍（あわれみ）、貪欲でないこと、温和、廉恥、落ち着き」（一六・二、『バガヴァッド・ギター』上村勝彦訳、岩波書店、岩波文庫、二〇〇九年——以下の『ギター』の引用はすべて本書からのもの）を重要な徳目としてあげています。ガンディーにとってこの聖典がもつ意義については、後段で改めて考えてみます。

次にガンディーが父について言及しているのは、親類の一人と一緒に喫煙をおぼえ、煙草を買う金欲しさに使用人の小銭をくすねたこと（一二、一三歳頃）、さらに借金の返済のために次兄の金の腕輪の一部を盗んだこと（一五歳頃）を、父に手紙で告白する場面です。

私は震える手で、手紙を父に渡しました。私は父の台の前に座りました。当時、父は痔ろうを患っていたので、寝具の上に横たわっていました。寝台の代わりに木の台が使われていました。

父は手紙を読みました。目からは真珠の粒がこぼれ落ちました。手紙は濡れてしまいました。父は瞬時、目を閉じました。手紙を引き裂きました。手紙を読むために自分で身を起こしていましたが、また、身体を横たえました。

私も泣きました。父の悲しみが理解できたのです。……

真珠の粒という、この愛の矢が私を突き刺したのです。私は浄化されました。この

愛は経験した者だけが知ることができるのです。

……

私にとっては、これが非暴力 (アヒンサー) の体験学習の第一課でした。そのときは、父の愛以外、何も分かりませんでした。今日になってみると、これを純粹の非暴力という名で認識できます。このような非暴力が普遍的な形を取るとき、これに感動するのを誰が避けられるでしょうか? このような普遍的な非暴力の力を測るのは不可能です。

このように穏やかな許容は父の性質に反するものでした。父は怒り狂い、激しい言葉の口にし、たぶん、自分の頭を割るのではないかと思っていました。しかし、父はこれほどまでに無限の平静さを保ちました。思うに、罪を率直に受け入れたことが原因でした。しかるべき人の前で、自発的に邪心なく罪を認め、二度と決してそのような罪を犯さないと誓う者は、最高の贖罪をすることになるのです。分かるのですが、告白によって、父は私の将来に心配することがなくなり、大いなる愛はさらに深いものとなったのです。 (『自叙伝 1』 六七-六八頁、一部改訳)

この記述には、キリスト教の信仰経験とよく似た体験が語られています。それは、神の前における罪の告白と罪の許しの経験を思い起こさせます。ただしガンディーは、この「罪の許し」という経験を個人的なものに解消せず、むしろそれを「非暴力」の経験として解釈し、その中に政治的・社会的な意義を読み取って行きます。

「アヒムサー」あるいは「アヒンサー」はサンスクリット語で、漢語では「不殺生」と訳されています——本論では、引用文においてもすべて「アヒンサー」の表記に統一してあります。この思想は、ヴェーダの宗教儀礼に批判的であったジャイナ教や仏教に固有の教えですが、後にヒンドゥー教にも取り入れられて、今日に至っています。それは、生前に殺生を行った者は、死後、殺した対象から責苦を受けるという輪廻の思想と結びついており、この思想はインドの諸宗教の説く菜食主義の大前提となっています。

ジャイナ教

ここではジャイナ教のケースをみておきます。というのは、一二世紀末になるとインドではムスリムの進出もあり、仏教は消滅しているからです。他方ジャイナ教徒は、現在も主に西インドから南インドに住んでおり、その数は三四〇万人を越えています。この数はインドの全人口の〇・四一パーセントにすぎませんが、ジャイナ教徒には都市部で商取引

を営む者が多く、経済界に対しかなりの影響力をもっています。

ジャイナ教には歴代二四人の教祖がいるとされていますが、その最後の教祖で最も敬愛されているのがマハーヴィーラ（生没年不詳、前五九九年から前三七二年まで諸説あり）です。彼はマガダ国のクシャトリヤの家に生まれ、三〇歳で出家し、一二年の苦行ののちジナ（勝者）となりました。ジャイナ教という名称はこれに由来します。マハーヴィーラはヴェーダの権威を否定し、真理相対主義の立場に立ち、輪廻からの解脱には、正しい信仰、正しい知識、正しい行いが必要であると説きました。この正しい行いには、不殺生、不殺生の最終的実践としての断食による死、無所有も含まれます。ジャイナ教の基本理念によると、人間はもとより、虫から微生物に至るまで、あらゆる生物に不滅の生命が宿っており、「アヒンサー」の思想が実践されなければなりません。具体的には次のような指導がなされます。「○ 肉食主義を厳守し、肉食をしないこと。○ 欲望のもととなるものへの執着心を捨てること。○ 動物を殺して、自然環境を破壊しないこと。○ 言動によって、特に嘘について、人を傷つけないこと。○ 精神浄化のためであるならば、断食で死ぬことも恐れないこと。」ジャイナ教徒の禁欲主義は徹底しており、生物を傷つける恐れのある漁業や狩猟に従事してはならず、農業の場合でも、地中にできる野菜を栽培することはできません。なおインドにおいて、「肉食」から「肉食」への展開が起こった背景には、移動から定住へという生活形態の変化と、牧畜から農業へという食糧生産様式の推移があったと考えられています。

では、ガンディー一家はジャイナ教とどんな関係をもっていたのでしょうか。『自叙伝1』には、次のような記述があります。

(1) ガンディー家はヴァイシュナヴ派（ヴィシュヌ派。ヴィシュヌは世界を維持する神で、不殺生と平等を説く。この神は、創造の神ブラフマー、破壊の神シヴァと並ぶ、ヒンドゥー教の三大神の一つ）。両親はとても熱心な信徒とみなされていました。ハヴェーリー（ヴィシュヌ派寺院）にしょっちゅう通っています。いくつかの寺院はガンディー家が寄進したものとされています。それに、グジャラートではジャイナ教の勢力が圧倒的。ジャイナ教の影響はいたるところで、ありとあらゆる営みにうかがえるのです。ですから肉食に対する抵抗、禁忌は、グジャラートにおいて、また、ジャイナ教徒とヴァイシュナヴ派信徒の間であって、インドあるいは世界のどこにも見られないほど強いのです。これが私のサムスカル（過去の世から受け継いだもの）。（『自叙伝1』五七頁）

(2) 父のところにはジャイナ教徒の指導者たちの誰かがいつも訪れていました。父は喜捨ももちろんします。宗教や日常生活について会話が交わされます。父にはイスラーム教徒やパールシー教徒(八世紀、イスラーム教徒に追われ、ボンベイ北方にやって来たゾロアスター教徒)の友人たちもいました。自分たちの宗教について語り、父はそれを敬意を込めて、たいていは興味深く聞いていました。私は「看護夫」であるため、こうした話題のときに、しばしば傍らにいます。こうした環境、すべての影響の結果、あらゆる宗教に対して偏見を持たずに接する気持ちになれたのでした。

キリスト教だけが例外でした。(『自叙伝1』七六頁)

(3) 母は言いました。「信じていますよ。だけど遠い国ではどうなるやら。どうしてよいか分からない。バーチャルジー・スワミーに尋ねましょう。」バーチャルジー・スワミーはモード・バニョー出身のジャイナ教修行僧でした。ジョーシージーのように家族の相談相手でした。相談にのってくれ、「この子にこの三つの誓いを立てさせよう。そうしたらこの子を(イギリスへ)やらせるのに何の差し障りもない」誓いを立てさせました。私は、肉、酒、女性に近づかない誓いを立てました。母は許可しました。(『自叙伝1』八五頁以下)

(4) 六歳か七歳から一六歳まで私は学校で学びましたが、宗教教育はまったく受けませんでした。先生方から自然と受けるべきものを受けなかった、といえます。それでも周囲から何らかのものを受けていました。ここで宗教の意味を広く理解しなければなりません。宗教、すなわち、自己を知ること、自己認識。

私はヴァイシュナヴ派の家に生まれたので、ハヴェーリー(ヴィシュヌ派寺院)へ行く機会は多くあります。しかし畏敬の念は生まれません。ハヴェーリーの豪華さは好きになれませんでした。ハヴェーリーでの不道德な話を耳にして、私はハヴェーリーに無関心となってしまいました。そこからは何も受けませんでした。(『自叙伝1』七三頁)

以上の引用から、ガンディー家はジャイナ教徒と深い交わりをもっていたこと、そしてガンディーはジャイナ教の修行僧の仲介で母との間に、イギリス留学においても「肉、酒、女性」を断つ誓約をしたことが分かります。彼は、高校時代に友人に誘われ、イギリス人

に対し強く、勇気ある者になろうとして「肉食」を試みたり、娼婦街へ行ったりしました。しかし、結局、両親に内密のままそれらの行為から遠ざかることを決断しました。

引用文(4)から明らかな通り、彼は学校で宗教教育を受けたことがなく、少なくとも留学前には、主体的に宗教を学んだり、関わったりすることもなく、社会および家庭の伝統行事として受け入れていたにすぎないようです。ただし後に彼が政治活動において展開した「非暴力」運動や「断食」などは、家庭と社会の宗教的環境なしには生まれませんでした。したがって彼は、生まれつきのヒンドゥー教徒というよりも、後に自らの伝統の意味に気づき、それを主体的に受けとめ直した再生のヒンドゥー教徒であると言えます。

母 プトゥリーバーイー

母は賢い女性であったという印象が残っています。とても敬虔でした。朝の礼拝をすませずに食事を口にするにはけっしてありません。ハヴェーリー（ヴィシュヌ派寺院）へいつも通っていました。物心がつく頃から、母がチャートゥルマース（字義は四ヶ月。雨季の四ヶ月間、願掛けをして断食、半断食をする）の断食をしなかったことは記憶にありません。どんな困難な断食でも始めたら最後までやり抜くのでした。始めた断食は、病気になってもけっして止めることはありませんでした。チャーンドラーヤン（断食の一種。月の満ち欠けに従って食事の量を増減する）の断食をしたときのことを覚えています。断食の期間中、母は病気になりましたが断食を止めませんでした。チャートゥルマースの期間中、一日一食は母にとってはごくあたりまえのことでした。これだけで満足せず、ある年のチャートゥルマースには二日で一食としました。続けて二、三回食事を抜くのは母にとってはあたりまえのことでした。（『自叙伝1』三〇頁）

断食する母の姿は、ガンディーにとって決して忘れられないものになっています。後に、自分の仲間たちが非暴力やサティヤグラハの道からそれて暴力に走ったとき、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の対立が暴動化したとき、また不可触民に対する差別を撤廃させようとしたとき、彼は南アフリカで二回、インドで少なくとも一六回、断食を敢行しています。それは、自分自身に向かつての問いかけであると同時に、インド人とイギリスに対する問いかけでもありました。それは、前項の(3)の引用に記されている「母の前での誓約」の遵守とみることもできます。ただし彼は、その誓約の最初の段階からこのよう

な「宗教的な形」の断食をイメージしていたわけではありません。

このことについて彼はこう述べています。

この時期まで私の(菜食主義に関する)実験は、経済的ならびに健康上の見地からでした。イギリス滞在中、こうした実験は宗教的な形を取っていませんでした。宗教的見地からの私の困難な実験は南アフリカで行われました。それは後の章で考察することとなるでしょう。しかし、実験の種子はイギリス滞在中に播かれたといえます。……菜食主義、これはイギリスでの新しい宗教でした。……頭で理解して肉食の擁護者となった後で、イギリスに行き菜食主義の道徳を、知的に理解してイギリスで受け入れたのです。(『自叙伝1』一一七頁)

ここでもガンディーは、自らの体験を通して伝統の意味を再発見し、さらにそれに政治的社会的機能を持たせたことが分かります。断食はこの菜食主義の先にある究極の「否定の道」であり、ガンディーは断食を敢行する毎に、母の断食の姿を思い起こしていたにちがいません。『自叙伝2』によると、「ガンディー家では、ヴァイシュナヴ派の断食日とともにシヴァ派の断食日も守られていました。」(『自叙伝2』一四二頁)

ブラフマチャリヤ

ガンディーは、一九〇六年、ズルー族の「反乱」による負傷者の看護のために従軍した際に、禁欲生活に入ります。それは夫婦ともに三七歳のときでした。彼はその時のことをこう述べています。

(1) 最終決定は、一九〇六年にすることができました。そのときは、サッティヤーグラハ闘争は始まっていませんでした。夢にも思っていなかったのです。ボーア戦争の後、ナタールでズルーの「反乱」が起こりました。そのとき、私はヨハネスバーグで弁護士業をしていました。しかしこの「反乱」のときにもナタール政府に奉仕を捧げなければならないと思いました。私は奉仕を申し出、受け入れられました。それは後で述べることにします。しかしこの奉仕に関連して、激しい思いが生まれたのでした。いつもの習性で、私は仲間たちにそれを話しました。産児と養育は公的な奉仕活動と相反するものと感じたのです。この「反乱」のために私はヨハネスバーグの家を引き払わなければなりませんでした。きちんと手入れされた家屋と、整えてやっ

と一カ月経ったか経たないかの家具調度を、私は放棄したのです。妻と子供たちをフェニックス農園におきました。私は衛生看護部隊を率いて出発したのです。困難な進軍をしながら、人々への奉仕に没入するのなら、子孫と富への欲望は放棄しなければならないし、ヴァーナプラスタ（林住期）の義務を果たさなければならないと分かったのです。（『自叙伝 1』三五六頁以下）

（2）十分に議論し、深く考えた後で、一九〇六年、ブラフマチャリヤ（本論では、すべて「ブラフマチャリヤ」と表記）の誓いを立てました。誓いを立てるまでは妻と相談しませんでした。しかし、誓いを立てるときに相談しました。妻の方から反対はありませんでした。……誓いはフェニックスで立てました。負傷者の看護の任務から解放されると、私はフェニックスに行きました。そこからヨハネスバーグへ向かうことになっていたのです。ヨハネスバーグへ行くと、一カ月経たないうちにサッティヤーグラハ闘争が開始されました。まるでブラフマチャリヤの誓いが、私をサッティヤーグラハ闘争のために覚悟させようとやって来たかのようです！サッティヤーグラハ闘争について、私はあらかじめ何の構想も持っていませんでした。闘争は、不意に、意思に反して発生したのです。しかし闘争以前の私のすべての行動——フェニックスへ行くこと、ヨハネスバーグで多大な出費を削減すること、最終的にブラフマチャリヤの誓いを立てること——がまさにサッティヤーグラハ闘争の準備としてあったことが分かりました。

ブラフマチャリヤの完全な順守とは、つまりブラフマー（創造神）にまみえること。この知識は経典から得たものではありません。この意味は自分の体験によってしだいに得たものです。それに関連する経典の文言は後になって読みました。ブラフマチャリヤには、身体の保護と知性の保護、魂の保護が含まれています。誓いを立てた後で、このことを日毎により多く体験するようになりました。そうして、ブラフマチャリヤを過酷な苦行とする代わりに楽しいものとし、それに従って実行しようと思いました。ですから、ブラフマチャリヤのさまざまな特質が、絶えず新しいものとして見えるようになりました。……

ブラフマチャリヤを守らなければならないとしたら、味覚を支配しなければなりません。私自身、体験したことで、もし味覚に打ち勝てば、ブラフマチャリヤを守るのはたいへん容易なものとなります。この理由で、以後の食事に関する実験は、たんに菜食主義の視点からでなく、ブラフマチャリヤの視点で行われるようになりました

た。……

断食なしに、感覚器官の対象への執着心の根絶は可能ではありません。ですからブラフマチャリヤを守るためには、断食は不可欠の部分となるのです。(『自叙伝1』三五九頁以下)

これらの記述から、今やガンディーは自らを林住期にある者と理解し、その義務を果たそうとしていることが分かります。彼は、性的禁欲を実践し、肉食主義もこの観点から捉え直し、その結果、断食は不可欠であると断定しています。彼によると、ブラフマチャリヤは神見に通じ、このブラフマチャリヤの行為がサッティヤグラハ闘争を生み出しました。

ここに突然登場する「林住期」とは、ヒンドゥー教の理想とするライフサイクルの一つです。バラモン教の聖典には、受胎・出生から臨終、さらに死後に至るまでの人生の指針と通過儀礼が定められています。これらは主要なものだけでも一二を数え、さらに再生族(入門式[成人式]を終えたバラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャの子弟)が生涯に経るべき諸段階も規定されています。これを住期といいます。それは、学生期(ブラフマチャリヤ、梵行)→家住期(グリハスタ)→林住期(ヴァーナプラスタ)→遊行期(サンニャーサ)、の四段階からなり、「四住期」と呼ばれます。学生期は、入門式(ウパナヤナ——バラモンの子弟は八歳、クシャトリヤの子弟は一一歳、ヴァイシャの子弟は一二歳)を終えてから、結婚して家庭に入るまでの時期に当たります。学生は、きまった師(グル)について『ヴェーダ』の学習に励まなければなりません。弟子入りすると、師の家に住み込み、厳格な禁欲と純潔の生活を守ります。その学習年限は、実際には目的と資質によりかなり幅があります。この学業を終えた再生族は、次に人生の第二の住期である家住期に入ります。結婚はヒンドゥー教徒にとって重大な宗教的行為とみなされ、結婚式を終えた家長の務めは、ヒンドゥー教が古来人生の努力目標としてきた三つの目標、つまり法(ダルマ)と利益(アルタ)と愛欲(カーマ)を追求することにあります。結婚した者は家業を継ぎ、家長として家庭の諸々の祭儀を執り行うなど、宗教的・社会的義務を果たさなければなりません。

「ダルマ」は「ひとつのものの存在を維持するもの」という意味ですが、ここでは普遍的に妥当する倫理や責務のことではなく、身分社会における各々の区分や立場に相応するものを指しています。今日なお守るべき努めとされているのは、次の五つです。第一は、ヴェーダを読誦してブラフマーを喜ばせること、第二は、祖霊に水をささげ、適時に祖先

祭を行うこと、第三は、祭火に供物を投じるホームをもって神々を礼拝すること、第四は、地面や水中に穀物を撒き、生きとし生けるいっさいの生類や鬼神を供養すること、第五は、人間を心から賓客として饗応することです。

「アルタ」は、親から引き継いだ家業に精励して、それを繁盛させ、家族をよく扶養して一族の繁栄をはかり、同時にカースト社会の発展に寄与することを求めています。「カーマ」の教えは、家長が妻とともに愛の喜びを享受しつつ、男児誕生に励むように勧めています。

これらは驚くほど現実的な教えであり、しかも「四住期」の中で最も大切なのはこの家住期であると言われています。人生の三つの目的は、いずれも人間の本能を否定するというよりも、それを浄化し、正しく導くことを主眼としています。したがってこの段階のヒンドゥー教では、宗教と倫理あるいは道徳は不可分なものになっています。

「林住期」は、長男が家督を継いだ後、森の中で苦行と瞑想に努めるときであり、「遊行期」は、「林住期」の修行が完成した後、何も持たずに、ただ乞食だけで生きながらえつつ、魂の解放を求めてひたすら遍歴するときです。それは「解脱（モクシャ）」を目指しています。「林住期」と「遊行期」の二つは、家住期と異なり、世俗を否定することを目的としており、ここにおいてヒンドゥー教のダルマは、倫理から完全に脱世俗へと転ずることになります。

古代インド人は、人間の生きうる理想的な寿命を百年と考え、それぞれの住期に二五年を配分しました。彼らの平均寿命を考えると、この教えは、すべての人の一生涯を、その誕生から死に至るまでそっくり宗教的枠組の中に包み込むと共に、この教えが、世俗に生きる人にとって負担にならないようにしているかのようです。この配分によると、大抵の人は、林住期に入る前に死んでいたはずだからです。

もしもヒンドゥー教の理想的なライフサイクルが以上のようなものだとすると、ガンディーの禁欲主義への決断はどのように考えればよいのでしょうか。引用の(1)には、林住期への言及が出てきます。しかしその文脈は、公的生活のために私生活を放棄しなければならないということであり、それは、四住期の中の林住期が求めているものと異なっています。後者では、解脱が最終目標となっており、社会つまり公的生活そのものから退くことが求められているからです。また引用の(2)には、ブラフマチャリヤへの言及があります。しかしこの文脈も、ライフサイクルで言うブラフマチャリヤではありません。元来それは、師について学ぶ時期、そして結婚前の時期を指すからです。ガンディーはすで

に結婚しており、彼の生活は家住期に属しています。そこでは、カーマの追求は当然のこととされています。それが浄化されたものになることが期待されるとしても、それを放棄するように求められてはいません。

この意味で、公的な社会生活を送りながら、禁欲主義を遵守しようとするガンディーの選択は、彼独自の判断であるということが出来ます。しかしこの生き方が、インドの一般民衆の心を掴んだことは事実です。では、なぜ民衆は彼に従おうとしたのでしょうか。彼の政治的手腕に踊らされただけなのでしょうか。それとも他に何か別の理由があったのでしょうか。

「衣」の伝統的意義と役割

インドの大半は熱帯ないし亜熱帯に属するため、「衣」なしに過ごすことも可能であり、ここには、いわゆるファッションという意味での「衣」へのこだわりはほとんどみられません。ところが、身体を包み隠すというその機能に加えて、それを着用する者の属性を表す機能へのこだわりは、大変強いようです。衣服は、その人の属性を表示する記号にさえなっています。この属性とは、男女の性別、所属するカースト集団、地域的帰属、人生の段階(既婚か未婚か)などを指します。また同じものであっても、その着方によって、あるいはかぶり方によって、その地域、職業、および階層が分かるようになっています。

ガンディーの場合、興味深い事実が知られています。彼は生涯の間に、外見的に、何回か変身しています。ロンドン留学中は、イギリス紳士のように三つ揃い(背広、チョッキ、ズボン)を着用し、ネクタイを締めていました。弁護士として渡った南アフリカでも、彼はしばらくのあいだ洋装のままでした。しかし、一九一五年、ボンベイ港に帰国したガンディーは、以前と打って変り、ターバンを巻いた労務者風の出で立ちに身を包んでいました。さらに独立運動の過程で、彼は西洋風の身なりを捨て、最後には半裸に近い姿となって民衆の先頭に立ちました。彼は自らの身体から衣服や飾りを剥ぎとり、人びとにも装飾、宝石、色彩を捨てるように求めました。彼の腰布(ドーティー)のみの出で立ちは、イギリス製品の拒絶、西洋化の排斥という決然たるメッセージと結びついていました。

またガンディーの半裸の姿は、インドに内在する多元性および複数性を越えた、「インド的なもの」を人びとに感じ取らせる役割を果たしました。そのため、彼の出で立ちは、国民的支持をまとめ上げるための手段であり、「巧みな演出」であった、と評する専門家もできます。しかし私は、それは政治的「演出」というよりも、あの「断食」の場合と同様に、彼自身にとって極めて実存的な決断の結果であり、だからこそ民衆は彼に従った

のではないかと考えています。民衆は単純に踊らされたのではなく、彼らの内に生きている宗教的無意識が刺激されたのです。

インドでは、ヒンドゥー教の寺院で神の前に立つときや、貴人に面会するときなど、今なお、男性は上半身裸になるように求められることがあります。寺院内で神像の世話に当たる司祭も、冷涼な地域を除き、職務中は基本的に上半身裸です。つまり着衣は、聖なるものや高貴なるものとの交わりにおいて、妨げになると理解されています。聖職者だけでなく、インドの神々が裸体ないし半裸で表現されることが多いのは、裸身それ自体に神聖な意味が付与されているためです。

さきに紹介したジャイナ教は、この理念を徹底して推し進めました。一糸まとわぬ聖者の立像は、ジャイナ教の「無所有」という戒律の象徴的表現と解されています。ジャイナ教の修行者の中には、今なお裸で過ごしている人がいます。

「サードゥ（行者）」または「サンニャーシン（遊行者）」と呼ばれる人びとも、世俗的な価値観から離れ、粗末な布をまとっただけの出で立ちで過ごしています。このサードゥは、そのほとんどが四住期の段階を経ずに、年若くして世を捨てた求道者か、半ば職業化した人たちですが、彼らにまじって林住期ないし遊行期の隠遁者も、裸体に近い姿で修業しています。

このような宗教的伝統を考慮に入れると、ガンディーの白い腰布のみの出で立ちは、民衆にとって特別な意味をもったと想定することができます。前項では、彼のブラフマチャリヤ（学生期）やヴァーナプラスタ（林業期）の理解が必ずしも伝統的なものと一致しないことを指摘しましたが、それにもかかわらず、彼の半裸の姿は、行者や、林業期ないし遊行期にある修行者というイメージを喚起したと思われる。ヒンドゥー教徒は、神（神像）にまみえる際に、下半身に白い腰布を着用することを求められており、ガンディーの半裸の姿だけでなく、その「白」の着衣も宗教的な意味をもったのです。

『バガヴァッド・ギーター』

森本達雄は、その著『ヒンドゥー教』（中公新書、中央公論新社、二〇〇八年）において、次のような興味深い事実を指摘しています。

ある人はガンディーを、彼の命がけの無私の行為をもって「カルマ（行為）・ヨーギン（ヨーガ行者）」と呼び、またある人は、神と人への献身的な愛の求道をもって、「真正のバクタ（神愛）」と呼び、そして、またある人は、つねに「洞窟（瞑想の場）を担^{かつ}

いで歩いた」彼のためまぬ瞑想と見神の日々によって、「ジュニャーナ(知識)・ヨーギン」と呼ぶのである(三六二頁)。

この引用に出てくる「ヨーギン」という語は、「ヨーガ」を実践する行者を指します。そしてこの「ヨーガ」には、「精神と肉体を制御・統一して[ブラフマン(最高原理)と]結合する」という意味と、「手段・方法・工夫」という意味があります。「ジュニャーナ・ヨーガ(知識による道)」、「カルマ・ヨーガ(行為による道)」、「バクティ・ヨーガ(真愛による道)」の場合には、後者の意味で用いられています。

では、森本の紹介するこのようなガンディーの評価は、インド精神史のどのような流れに起因しているのでしょうか。第二章を閉じるに当たり、ここで、インド思想の基本的関心と彼の愛読した『バガヴァッド・ギーター』の特質を概観しておきましょう。

(1) インドの諸宗教は、輪廻の繰り返しの苦しみから、つまり生前の善行と悪行の結果、天界、地上界、地獄などでさまざまな姿をとり、生死を繰り返す苦しみから「解脱」することを究極目標としています。「ジュニャーナ・ヨーガ(知識による道)」が目指しているのは、滅びゆく肉体に宿っている常住不変の純粋なアートマン(真我)の存在を知り、しかもそれが宇宙万物の根本原理であるブラフマン(梵)と一つであること(梵我一如)を知ることです。この目標は、師について聖典の教えを聞くこと → 求道者がみずから思惟し反省すること → 深い瞑想、という過程を通して達成されます。ひとはこの経験を経ることにより、絶対安心立命の境地に入り、輪廻転生から解放されるというわけです。

(2) ところが『バガヴァッド・ギーター』における「カルマ・ヨーガ」は、古代インドの宗教書のように、社会から身を引いて寂情の境地に達することを求めず、この世において自己の義務を果たしつつ、究極の境地に達することができると説いています。社会人は、むしろその定められた行為(カーストに課せられた日常の義務)を決して捨てるべきではなく、次のように勧められています。「祭祀と布施と苦行の行為は捨てるべきではない。それは行われるべきである。賢者たちにとって、祭祀と布施と苦行は浄化するものである(一八・五)。しかし、それらの行為は、執着と結果とを捨てて行われるべきである。アルジュナよ、これが私(クリシュナ)の最高の結論である(一八・六)。「あなたの職務は行為そのものにある。決してその結果にはない。行為の結果を動機としてはいけない。また無為に執着してはならぬ(二・四七)」と。

このように「カルマ・ヨーガ」の行為は、結果を動機としない、義務のための義務の行

為を要求しています。この論理は、行為の報いを自ら否定すること（無私の行為）を求め、また行為を否定媒介的に積極的に評価するという意味で「聖化の大衆化への道」を開いて行きました。つまりすべてのひとが日常生活において解脱に至る可能性を生み出しました。

ガンディーは断食について興味深い言葉を残しています。それは明らかにこの「カルマ・ヨーガ」の精神を自らの状況において再現しようとしています。彼はこう言います。

サティヤグラハの信奉者は、他の解決策をことごとく試み、それに失敗したときに、はじめて最後の手段として断食に訴えるべきである。それゆえに、断食には贖物の入る余地はない。内なる力をもたない人は、断食のことなど考えるべきではないし、また成功への執着をもって行ってはならない。けれども、ひとたびサティヤグラハの信奉者が自己の信念から断食を始めたならば、彼の行為に成功の機会があろうとなかろうと、あくまでも決意をつらぬかねばならない。このことは、断食が成果をもたらすことができるとかできないとかいう問題ではない。成果を期待して断食を行う者は、おうおうにして失敗する。また、たとえそれが表面的には失敗でなくとも、ほんとうの断食によって得られる内的な喜びをことごとく失うことになるのだ。……

けれども、断食することが一つの義務となると、それを断念するわけにはゆかない。それゆえにわたしは、断食が必要であると考え、どうしてもそれが避けられないときには、断固として断食を執行する。……

(M・ガンディー『わたしの非暴力2』森本達雄訳、みすず書房、二〇一〇年、一二八頁以下)

(3) 解脱に至るには俗界を離れ、出家遊行者とならねばならないと教えてきたヒンドゥー教の歴史において、「カルマ・ヨーガ」の教えは画期的なメッセージでした。しかし現実問題として、世俗に生きる家住者が、行為の結果を求めずに実践することは至難の業であったはずで。ところが『バカヴァッド・ギーター』の説く「バクティ・ヨーガ」は、こう言います。「たとい極悪人であっても、ひたすら私(クリシュナ)を信愛するならば、彼はまさしく善人であるとみなさるべきである。彼は正しく決意した人であるから(九・三〇)。実に、私に帰依すれば、生れの悪い者でも、婦人でも、ヴァイシャ(実業家)でも、シュードラ(従僕)でも、最高の婦趨(行き着くところ)に達する(九・三二)。いわんや福德あるバラモンたちや、王仙である信者たちはなおさらである。この無常で不幸な世に生まれたから、私の身を信愛せよ(九・三三)。」ここでは、森羅万象の背後に遍在する不

生不滅の最高原理であるブラフマンが、クリシュナと同一視され、しかもこのクリシュナは、世界を維持する神ヴィシュヌの化身とされています。つまり神への献身の道が開かれたのです。今や「バクティ・ヨーガ」により、仏教で言う「他力」の世界が開示され、ヒンドゥー教は民衆の信仰としてインドの土壤に根づいて行ったのです。